

韓国語の呼称に表れた子供の位置

上林順錦

0. 序

筆者は上林（2006）で韓国語の人称詞の考察を試みた。従来ほとんど手をつけられていなかった分野に先鞭をつけるものだったが、それは鈴木孝夫の、日本語の人称詞に関するすぐれた研究（鈴木（1968）、鈴木（1970）、鈴木（1971）鈴木（1973）等）にある、いわゆる西欧諸語には見られず日本語に特有とされた人称詞の用法が、韓国語においてどの程度あてはまるかを見るところから始まった。

結果は、韓国語の用法は日本語と驚くほど類似しているというものであった。しかし詳しく観察すると、微妙なところでの相違があった。今回はその微妙な差に着目することによって、そこから見られる韓国文化の一側面を伺う手がかりが得られると思う。

1. 日本語の人称詞の用法

鈴木孝夫の人称詞に関する研究を鈴木（1973；129－145）に基づいてまとめておく。

鈴木は西欧諸語、もう少し厳密に言えばインド＝ヨーロッパ語族に属する諸言語における一人称代名詞（英語のI、フランス語のje等）、二人称代名詞（英語のyou、フランス語のtu、vous等）は何千年もの間、同じ語が用いられてい

るのに対し、日本語の「人称代名詞」とされる「ぼく」「私」「きみ」「あなた」等はみな歴史が短いこと、しかもこれらはみな西欧諸語の代名詞が人称専用の語であったのと異なり、もとは何らかの具体的な意味を持っていた実質詞からの転用であることに着目し、日本語においては一人称代名詞、二人称代名詞という概念は有効でないとしている。

そして話し手が自分自身に言及することばすべてを総括する概念として「自称詞」、話し相手に言及することばの総称として「対称詞」を定義した上で、日本語の自称詞と対称詞の分析を行なっている。

鈴木は日本語においてこの「自称詞」「対称詞」がどのように用いられているかを観察した結果、まず親族関係において、そしてそれを親族以外の社会的状況に拡大して次のような法則を見出した。

(一) 話し手は目上に属する人に人称代名詞を使って呼びかけたり、直接に言及したりすることはできない。目下の者には人称代名詞で呼びかけたり、言及したりする¹ことはできる。たとえば、父、兄、おば、あるいは先生や上役等に対しては「あなた」と言えないが、息子、弟、姪、あるいは部下に対しては「あなた」「きみ」と言える。

(二) 話し手は、目上の者を普通は親族名称や立場を示す名称で呼んだり、言及したりする。目下の者には親族名称や立場を示す名称で呼びかけたり、言及したりすることはできない。たとえば、相手を「おかあさん」「おねえさん」「おじさん」「先生」「先輩」と呼んだり、そのことばで相手に言及したりすることはできるが、「娘」「妹」「甥」「生徒」「後輩」と呼んだり、言及したりすることはできない。

(三) 話し手は目上の者を名前だけで直接呼んだり、言及したりすることはできない。目下の者を名前だけで呼んだり、言及したりすることはできる。

(四) 話し手が目上の者に対して自分を名前で称することは可能だが、目下の者に対してはできない。娘が母親に向って自分のことを「由美はね」と言えるが、母親が自分の娘に向っては言えない。「課長、これは山本にお任せください」とは言えるが、上役がそのように言うことはない。

(五) 話し手は目下の者を相手とする時は、自分を相手の立場から見た名称で言うことができるが、目上の者に対してはそれができない。たとえば息子に向って自分のことを「お父さん」と言えるが、息子が父に向って自分のことを「息子」とは言えない。先生が生徒に向って自分のことを「先生」と言えるが、生徒が先生に向って自分のことを「生徒」とは言えない。

そしてこれらから、親族集団内では目上の者は目下の者が自分を呼ぶ、まさにそのことばを引き取って自分のことを称するという、一般的法則を見出している。

そして鈴木（1973）ではこの点が述べられておらず、実は上林（2006）でも言及できていなかったことが二点ある。

すぐ上に鈴木の本主張として「親族集団内では目上の者は目下の者が自分を呼ぶ、まさにそのことばを引き取って自分のことを称するという、一般的法則」としたが、第一点として「親族集団内では」という限定は必要ない。先生が生徒に向って自分のことを「先生」と言える。つまり、親族外の社会的状況に拡張してもまったく同様のことが言える。

そして第二点として、「目上の者は目下の者が自分を呼ぶ、まさにそのことばを引き取って自分のことを称する」とあるが、鈴木の一から（五）をすべて認めるならば、これは「目上の者」に限らず、「目下の者」にも当てはまる法則と言える。実際、（四）で「由美はね」とか「山本に」とかいう例を出しているのは、（三）と関連させて、目下の者にもこの法則があてはまると言うためのものだったと思われる。²

ただ、上林（2006）でも指摘しておいたが、（四）には問題がある。このような用法にはかなり限定がある。親族関係に関しては少なくとも女性に限られる。「由美はね」と言うことはあっても、「太郎はこう思います」とは言わないであろう。

また親族以外に関しては、こういう言い方は最近はあまりしないのではないだろうか。

2. 日本語と比較した韓国語の人称詞の用法

上林（2006）は鈴木の分析に基づいて韓国語の人称詞を考察した。

（一）に関しては日本語と同様である。父、兄、おば、先生や上役等に対しては당신dang-sin（あなた）とは言えないが、息子、弟、姪、生徒、部下等に対して는너neo（おまえ）と言える。

（二）に関しては、親族名称に関しては、目上の者に対してだけでなく、目下の者に対しても言える。엄마eom-ma（おかあさん）、언니eon-ni（おねえさん）、삼촌sam-chon（おじさん）だけでなく、딸ddar（娘）、아들a-deur（息子）、동생dong-saing（弟または妹）、조카jo-ka（甥または姪）とも言える。ただ目下の者と呼んだり、言及したりするときには使用上の制限がある。親族以外の場合は日本語と同様である。선생님seon-saing-nim（先生）、선배님seon-bai-nim（先輩）とは言えるが、학생hag-saing（生徒）、후배hu-bai（後輩）とは言えない。

（三）に関しては日本語と同様である。目上の者を名前で呼んだり、言及したりすることはできない。目下の者を名前で呼んだり、言及したりすることができる。

（四）に関しては、目上だけでなく、目下の者も自分のことを名前で言及することはできない。ただ、これに関しては前述のとおり、日本語でも使用がかなり限定されているので、日本語との異同を論じるには問題がある。

（五）に関しては日本語と同様である。母親が自分の息子に向かって自分のことを엄마eom-ma（おかあさん）と称することはできるが、息子が自分の母親に向かって自分のことを아들a-deur（息子）と称することはできない。先生が生徒に向かって自分のことを선생님seon-saing-nim（先生）と称することはできるが、生徒が自分のことを학생hag-saing（生徒）と称することはできない。

このように見てくると、データに問題がある（四）を除けば、日本語とほど

んど同じことに驚かされる。

ただ一つの相違点は親族名称における(二)、つまり目下の者に向けて 딸 ddar (娘)、아들 a-deur (息子)、동생 dong-saing (弟または妹)、조카 jo-ka (甥または姪)と呼べるという点である。今回はこのことに着目して韓国文化の一つの側面を考える手がかりとしたい。

3. 韓国語の人称詞の研究の可能性

上林(2006)で述べておいたが、鈴木日本語の人称詞に関する研究はすぐれたものであるにもかかわらず、残念ながら鈴木本人も、他の研究者も鈴木(1973)以後、この方向での研究を進展させていない。

そして韓国語における人称詞の用い方はきわめて興味深いものなのに、ほとんど手をつけられていない。羅(1992)、任・井出(2001)、斉藤(2005)にごくわずかに言及されているが、それらは韓国語の人称詞のほんの一部であるにすぎず、人称詞全体を見渡した包括的な研究はない。

さすがに最近あまり見られなくなったが、以前、一般社会でたまに見かけた言語と文化の相関関係に関する巷説の中には、言語の音韻的特徴、統語的特徴など、言語体系内の特性がその言語を有する社会の文化と関係を有するというものがあつた。

例えば「日本語に母音の出現頻度が高いのは日本人の開放性のゆえだ」とか、「日本語に促音という単位がある、つまり音のないところに単位を認めるのは間(ま)の日本文化と関係がある」とか、「日本語では述語が最後に来るのは、態度の表明をはっきりしないで、最後までうやむやにしようとする日本人の民族性のゆえだ」といった言説は、今ではまともに受け入れられることはほとんどないであろう。

しかし、人がある行為を行なうときに、ある言語体系をどのように用いるのかは、その社会の文化を反映していると考えられる。人称詞の用法はこちらの

性質を有している。だからこそ日本の社会言語学のパイオニア的存在である鈴木孝夫も率先してこの問題をとりあげたのであろう。

それを思えば、韓国語の人称詞の研究は韓国文化の特性を探るための大きな手掛かりになると考えられるが、しかし、すでに述べたように、この分野はほとんど手がつけられていない。今回、この方面の研究の一つのステップとして、一つの仮説を提示してみたい。

4. 目下の親族に対して親族名称を使うのは名前のタブー視による

日本語と韓国語の相違点は、日本語のデータに問題がある（四）を除けば、親族関係における（二）の点、つまり日本語では対称詞として「息子」「弟」「甥」等は使えないのに対し、韓国語では딸 *ddar*（娘）、아들 *a-deur*（息子）、동생 *dong-saing*（弟または妹）、조카 *jo-ka*（甥または姪）等が使えるという点であった。上林（2006）ではごく簡単に言及したこの点について、考察を加える。

最初に明らかにしておくべきことは、目下の者を表す親族名称と言っても、아들 *a-deur*（息子）、딸 *ddar*（娘）は、ほかのもの、例えば동생 *dong-saing*（弟または妹）、조카 *jo-ka*（甥または姪）とは異なるということである。

아들 *a-deur*（息子）、딸 *ddar*（娘）は、ほかの親族名称と異なり、相手がまだ子供の時に使える、と言うより、むしろ子供の時にのみ使える表現である。³ この二つを除くと、동생 *dong-saing*（弟または妹）、조카 *jo-ka*（甥または姪）などは相手が子供の時には使わない、相手が大人になってからはじめて使う表現である。

例えば、兄が弟に対して、あるいは叔父や叔母が甥に対して、その弟なり甥が子供の時は（三）に従って용준 *yong-jun*（ヨンジュン）等の名前を呼んだり、名前を使って言及したりするのだが、この弟なり甥が成長して大人になると、名前を使わずに、동생 *dong-saing*（弟または妹）、あるいは조카 *jo-ka*（甥または姪）と呼んだり、この言葉を使って言及するようになる。

親族以外の（二）の用法、つまり 학생hag-saing（生徒）、후배hu-bai（後輩）とは言えないという点も照らし合わせて考えてみると、目下の者と呼んだり言及したりするときは名前を使うのが当然であって、この点だけが例外と考えるべきである。

実例として、1996年公開の『축제（祝祭）』という映画から台詞を拾ってみよう。

映画の設定は以下のようである。田舎にいた老母の臨終に、いろいろな地域に住んでいた子どもたち、親戚一同、村の人々が集まって葬式を執り行う。長男はすでに故人で、その未亡人と老母と一緒に暮らしていた。次男의준섭jun-seob（チュンソップ）は小説家として名声を得、村の誇りになっている。チュンソップに二人の姉がいる。後で出す例のことを考えて先に言っておくと、長男の息子は원일ueon-ir（ウォンイル）、チュンソップの娘은지eun-ji（ウンジ）という名前である。

葬式のために兄弟たちより遅れてソウルから到着したチュンソップに上の姉が言う。

「동생 오는가?

（弟、今来たの?）」

そして弟を母の遺体と対面させる場面では、母の遺体に向かってこう言う。

「엄니, 준섭이 왔어라우.

（お母さん、チュンソップが来ました。）」

これは他に誰もいず、母に向かって言っている場面だし、「チュンソップ」が対称詞ではなく、いわゆる「三人称」で用いられているなど、様々な条件があるので、実名を用いることが可能になっていると思われる。

それではなぜ相手が大人になってからは동생 dong-saing（弟または妹）、조카 jo-ka（甥または姪）等の表現を使うのだろうか。上林（2006）で簡単に述べておいたが、これは韓国人が大人の名前を呼んだり言及したりすることをタブー視する傾向が非常に強いからである。

だから、成人したあとで生じる姻戚関係の場合は、例えば매제 mai-jeoi（妹の夫）は名前で呼ぶことができない以上、매제 mai-jeoi（妹の夫）と呼ぶしかない。日本語では「健一さん」あるいは「山田さん」のように「さん」をつけるのが一般的だが、韓国語ではそれはできない。⁴

『축제（祝祭）』にはチュンソップの妻がこう言う台詞がある。

「질부, 나 물 한 그릇 줄래?（甥の妻、水一杯ちょうだい。）」

질부 jir-bu（甥の妻）も姻戚関係、つまり相手が成人したあとで知り合う関係なので、名前は使えず、こう呼ぶしかない。

実名を使うことをタブー視することは多くの社会で見られるが、社会によってその程度の差がある。周知のようにいわゆる西欧社会ではそれがほとんどなく、自分の舅、姑、大学の指導教官などに対しても、親しくなった場合はファーストネームで呼ぶこともある。⁵

そして韓国社会はこのタブーの度合いが日本よりも強いのである。

特に名前を呼ぶことがはばかれるのは、相手に社会的地位がある場合、公衆の面前、自分より目上の人がいる場合、話し手と相手が異性の場合などである。

韓国社会において、名前に対するタブーがかなり強いことの一つの証拠として、自分の親なり、指導教官なり、上役なり、目上の人の名前を引用にしろ口に出すことはできない。例えば日本語ではお父さんのお名前をフルネームで言っ

てくださいと言われて「山田健一です」と言うことはできるが、韓国語では
뱀용준 입니다 bai yong-jun ib-ni-da (ペ・ヨンジュンです) などとは決して言
えず、뱀 자 용 자 준 자 입니다 bai ja yong ja jun ja ib-ni-da (ペという
字とヨンという字とジュンという字です) という、もってまわった言い方をし
なければならない。

5. 子供の名前はタブー視されない

韓国語においては目下の者に対しても親族名称を使うのは、名前を呼ぶこと
をタブー視するからだと言った。

それは、目下の者に対しては名前を使うのが原則だという立場から導かれる
説明である。しかし、すでに見たように、韓国語における名前のタブー視とい
う傾向はかなり強いものである。

2節では親族以外の人称の用法の(三)として、生徒を名前だけで呼んだり
言及したりできると言ったが、実はこれも相手はかなり年齢を重ねたり、ある
いは社会的地位ができた後では、少なくとも公的な場面では許されない。この
場合は뱀용준씨 bai yong-jun ssi (ペ・ヨンジュンさん) のように言う。

このように、韓国社会においては名前のタブー視がかなり強いことを考える
と、今まで、なぜ目下の者に対しても親族名称を使うのかという形で提起して
きたこの問題は、これほど名前を呼ぶことがタブー視される韓国社会において、
なぜ子供の名前は使ってもよいのかという問題としてとらえ直すことができる。

実はそうとらえ直すべきとする根拠になる韓国語の人称詞の用法を二つ、す
でに上林(2006)であげておいた。二つとも、日本人にとっては意外な用法
である。

一つは、羅(1992; 88-89)、任・井出(2004; 228-231)、斉藤(2005:
35-36)にごく簡単に述べられている、유리 엄마 yu-ri eom-ma (ユリのお

かあさん)、유리 아빠yu-ri a-bba (ユリのおとうさん) という言い方である。日本語の「ゆりちゃんのおかあさん」という表現は、そう呼ばれる人と呼ぶ人がゆりちゃんという子供を通して関係がある場合、例えばゆりちゃんの友達とかゆりちゃんの友達のおかあさんが呼ぶ場合に限られるが、韓国語의 유리 엄마yu-ri eom-ma (ユリのおかあさん) にはそういう制限はなく、非常に一般的に使われる表現である。

夫婦間の呼び方は日本語では「洋子」「健一さん」のように名前を用いるのが普通だが、韓国社会ではそれは許されない。特に自分たちより目上の人がいる場面とか、公的な場面であれば、できない。その結果、子供が生まれたあとはお互いに、子供の名前を使って、유리 엄마yu-ri eom-ma (ユリのおかあさん)、유리 아빠yu-ri a-bba (ユリのおとうさん) と呼び合うのが普通である。

『축제 (祝祭)』の例を見よう。

亡き長男の妻が、次男チュンソップの妻に向かって、チュンソップが有名人だからたくさんのお客が訪れると思って、食事をたくさん用意したのに、とてもお客が少ないのを見て、こう言う。

「아제 이름난 걸로 봐선 사람이 미어질 줄 알았더니…。 저 많은 음식을 다 어쩐다냐.

(夫の弟が名が売れているから、もっとお客がたくさん来ると思っていたのに。あのたくさんのご馳走、どうするの。)

それに対して次男チュンソップの妻はこう答える。

「은지 아빠가 사람들에게 꽤 기친다고 연락을 많이 안 했어요.

(ウンジのお父さんが人々に迷惑をかけてはいけないと言って、あまり連絡をしませんでした。)

ここで長男の妻が次男チュンソップのことを아제 a-jeoi (夫の弟) と表現しているのは、前節で扱ったことだが、チュンソップの妻が自分の夫のことを, 은지 eun-ji (ウンジ) という自分の娘の名前を使って, 은지 아빠 eun-ji a-bba (ウンジのお父さん) と表現しているのである。

そして、こういう呼び方は夫婦間だけではない。ユリの母に対して、実の親でも、舅でも、姑でも、他の親族でも、また近所の人も유리 엄마 yu-ri eom-ma (ユリのおかあさん) と呼ぶことができる。

『축제 (祝祭)』の別の場面を見よう。チュンソップの母が徘徊するようになったので、部屋から出てこられないように、長男の妻が鍵をかけたことに関して、次男のチュンソップと相談したかどうかについて、チュンソップの知人に質問された村の人が答える場面である。

「며느리 자식 처지에 원일 어머니 혼자 마음대로 했겠어요?

(一人は嫁で一人は実の息子です。ウォンイルのお母さんが独断でやったのでしょうか?)

ここで村の人が、つまり他人が、長男の妻のことを、その息子の名を使って 원일 어머니 ueon-ir eo-meo-ni (ウォンイルのお母さん) と表現している。

また, 유리 엄마 yu-ri eom-ma (ユリのお母さん)、유리 아빠 yu-ri a-bba (ユリのお父さん) だけでなく、ユリの祖父のことを유리 할아버지 yu-ri har-a-beo-ji (ユリのおじいさん)、유리 외할아버지 yu-ri oi-har-a-beo-ji (ユリの母方のおじいさん)、ユリの祖母のことを유리 할머니 yu-ri har-meo-ni (ユリのおばあさん)、유리 외할머니 yu-ri oi-har-meo-ni (ユリの母方のおばあさん)、と呼ぶことも一般的になされる。また, 유리 삼촌 yu-ri sam-chon (ユリのおじさん)、유리 이모 (ユリのおばさん (母親の姉妹)) のような言い方もできる。

今度は1961年公開の『사랑방 손님과 어머니 (離れの客とお母さん)』という映画の台詞を見てみよう。1934年に発表された주요섭ju yo - seobの同名の短編小説を映画化したものだが、6歳の女の子옥희og-heui (オッキ) の目を通して、未亡人のオッキの母と、母の兄の紹介でその家の離れに下宿することになった、その伯父の友達 (離れの客) との淡い恋愛感情を描いたものである。未亡人は一生貞節を守ることが美德とされていた、しかしそれが少しずつ変わっていく時代背景において、互いに魅かれていきながらその気持ちを消そうとする二人、二人を結ばせてやりたいオッキの伯父、結婚してほしくないオッキの亡き父の母、つまりオッキの祖母の気持ちが錯綜する作品である。

その中でオッキの伯父がオッキの母、つまり自分の妹に再婚の意志があることを確かめてからオッキの祖母に会いに行くとするとき、オッキの伯父が言う台詞である。

「내가 오늘 밤이라도 옥희할머니를 찾아뵈야 겠다.

(今夜でもオッキのお祖母さんに会いに行って話したほうがいいと思う。)」

ここでは自分の妹の姑にあたる人のことを옥희 할머니og-heui har-meo-ni (オッキのお祖母さん) と呼んでいる。

それから、これは上林 (2006) では述べなかったことだが、孫のいる人がその孫の父あるいは母、つまり自分の息子あるいは嫁のことを유리 아빠yu-ri a-bba (ユリのお父さん) 유리 엄마yuri-eom-ma (ユリのお母さん) と表現するだけではなく、「誰々の父親」を意味する애미ai-bi、「誰々の母親」を意味する에미eoi-miを使って유리 애미yu-ri ai-bi (ユリの父親)、유리 에미yu-ri eoi-mi (ユリの母親) とも呼べるのだが、さらに単に애미ai-bi (誰々の父親) 에미eoi-mi (誰々の母親) と呼ぶことがある⁶。この用法は子供の名前が直接出ていないので、ここの論点から少しはずれるが、大人を名前を使わずにどう

呼ぶかという観点から見るとときに興味深いものであり、今までどの文献にも見られないので、少し例をあげておく。

『사랑방 손님과 어머니 (離れの客とお母さん)』で、オッキの祖母がオッキの伯父からオッキの母の再婚に関して相談され、オッキの祖母がオッキの母を家に来させて話す、クライマックスの場面である。

「널 이렇게 오라고 한 것은 다름이 아니라 옥희 삼촌 og-heui sam-chon (オッキの伯父さん)한테 얘기 들었다. 듣고 보니 어찌나 섭섭하고 서러운지. 다만 그동안 고부간이라지만 친모녀 못지않게 살아왔고 정이 들대로 들어서 이제 너를 내 앞에서 뚝 떠나 보낼 것을 생각하니 서럽고 마음 아플 뿐이지 그 밖에는 아무 것도 없다. 가서 좋은 남편 만나서 잘 산다면 낸들 얼마나 좋겠니. (あなたをこのように呼び出したのは他でもない。オッキの伯父さんから(あなたの再婚の)話を聞いた。その話を聞いてあまりにも心外で、悲しかった。嫁姑とはいえ、今まで本当の親子のように暮らしてきたので、情が移って今あなたが私の目の前からいなくなると思うと、寂しく、心が痛いだけだ。その他は何もない。行っていい夫に出会って、幸せに暮らすなら、それ以上の願いはない。)

어미는 마음씨 착하고 매사에 알뜰해서 그 심덕으로라도 어디 가서든지 복받고 잘 살거야. eo-mi-neun ma-eum-ssi chag-ha-go mai-sa-eoi ar-ddeur-hai-seo geu sim-deog-eu-ro-ra-do eo-di ga-seo-deun-ji bog-bad-go jar sar-geo-ya.

(誰々の)母親は心が優しく、しっかり者だから、どこに行っても祝福を受けて幸せに暮らせると思う。)

부디 좋은 사람 만나서 잘 살아다오. 그리고 가끔 놀러도 오고. 옥희는 네 마음대로 두고 가겠으면 두고 가고 데리고 가겠으면 데리고 가고.

(ぜひ、いい人に来て幸せになってくれ。そしてたまに遊びにも来なさい。オッキは置いていくか、連れて行くか、好きなようにしなさい。)

「어머니! eo-meo-ni
(お母さま!)」

「어미야! eo-mi-ya!
(誰々の) 母親!)」

ここにある옥희 삼촌og-heui sam-chon (オッキの伯父さん) という表現のことはすでに触れた。今、話題にしたいのは、姑が嫁に向って「어미⁷는 마음씨 착하고 매사에 알뜰해서 그 심덕으로라도eo-mi-neun ma-eum-ssi chag-ha-go mai-sa-eoi ar-ddeur-hai-seo geu sim-deog-eu-ro-ra-do (誰々の) 母親は心が優しく、しっかり者だから、」のように「対称詞」の言及する表現としても、「어미야! eo-mi-ya! ((誰々の) 母親!)」のように呼びかける形としても「어미eo-mi (誰々の) 母親」の形が使えるということである。

また、お手伝いさんをしていた未亡人が再婚して、オッキの家にあいさつに来る場面がある。

「변변치 않지만 잔치 음식 좀 싸가지고 왔어요.
(つまらないものですが、結婚式のお祝いのお料理を少し持ってきました。)

「원, 저런. 아, 애 에미야! 좀 받으려무나.
(あら、まあ。おーい。(誰々の) 母親。受け取りなさい。)」

これも、オッキの祖母がオッキの母を、つまり姑が嫁を呼んでいるところである。

ここまで、いろいろな場面において「ユリのお母さん」のように子供の名前

を使って大人を表現するいろいろな例を見てきた。

当初の、目下の親族が大人になったときに限って親族名称で呼ぶことができるのはなぜかという問題が、これほど名前を呼ぶことがタブー視される韓国社会において、なぜ子供の名前は使ってもよいのかという問題としてとらえ直すことができるということの根拠のもう一つは、任・井出（2004；230）にも軽く触れられているが、ユリのおかあさんあるいはユリのおとうさんを유리아!yu-ri ya!（ユリ！）と呼ぶ呼び方である。これは呼格的用法に限られるが、呼ばれる人の配偶者でも実の両親でも実の兄弟でも舅でも姑でもこう呼べる。例えば、夫が妻を、また妻が夫を自分の娘の名前を使って유리아! yu-ri-ya!（ユリ！）と呼べるのである。

『축제（祝祭）』には、チュンソップとその妻の間の次のようなやりとりがある。

「은지야! eun-ji-ya!
（ウンジ!）」

「왜요?
（なんですか?）」

「여기 판돈 좀 더 풀어줘.
（遊びに使うためのお金をあげなさい。）」

「얼마나요?
（いくらですか?）」

チュンソップが自分の妻を呼ぶのに、ウンジという自分の娘の名前を使って

いる。

また、『사랑방 손님과 어머니 (離れの客とお母さん)』に、オッキの伯父さんがオッキのお母さん、つまり自分の妹を道で見かけて呼びとめる場面がある。

「옥희야! og-heui-ya!

(オッキ!)

「어머나, 오빠 웬일이세요?

(あら、お兄さん。どうしたんですか。)」

「그래 옥희가 og-heui-ga 아프다더니 좀 어떠냐?

(オッキが病気だそうだが、具合はどうだ?)」

「이제 괜찮아요. 저녁을 먹은 게 관격이 됐던가봐요.

(もう大丈夫です。夕食を食べたのが当たったようです。)」

自分の妹を呼ぶのにその娘の名前を使っている。しかし、そのすぐ後に出てくる「옥희가 아프다더니 og-heui-ga a-peu-da-deo-ni (オッキが病気だそうだが)」の옥희og-heui (オッキ) は本当のオッキである。ちなみにこの映画の、日本で発売されたビデオの日本語字幕はこの箇所は「おい」になっている。日本語では、こういう場合、オッキの母の、つまり自分の妹の名前を呼ぶのだが、あいにくこの作品ではオッキの母の名前が分からないので、こうするしかないのである。

ところで、これだと、オッキを呼んでいるのか、オッキのおかあさんと呼んでいるのか、分からない可能性があるわけだ。実は、子供の立場で歌った、「私の名前」という歌がある。1984年の曲で、이규대i-gyu-daiと이아람i-a-ramいう親子が歌ってヒットしたものである。

「예술아! 할아버지께서 부르셔 .yeoi-sor-a! har-a-beo-ji-ggeoi-seo bu-reu-syeo. (「イエソル!」とお祖父さんがお呼びになる)

예 하고 달려가면 너 말고 네 아범 .yeoi ha-go dar-ryeo-ga-myeon neo mar-go neoi a-beom.

(はいと返事して走って行くと、「お前ではなくてお前のお父さんのことだ。」)

예술아! 아버지께서 부르셔 yeoi-sor-a! a-beo-ji-ggeoi-seo bu-reu-syeo.

(「イエソル!」とお父さんがお呼びになる)

예 하고 달려가면 너 아니고 네 엄마 yeoi ha-go dar-ryeo-ga-myeon neo a-ni-go neoi eom-ma.

(はいと返事して走って行くと、「お前ではなくてお前のお母さんのことだ。」)

아버지를 어머니를 예술아! 하고 부르는 건 a-beo-ji-reur eo-meo-ni-reur yeoi-sor-a! ha-go bu-reu-neun geon

(お父さんを、お母さんをイエソル!と呼ぶのは)

내 이름 어디에 엄마와 아빠가 들어계시기 때문일거야 .nai i-reum eo-di-eoi eom-ma-oa a-bba-ga deur-eo-gyeoi-si-gi ddai-mun-ir-geo-ya.

(私の名前のどこかにママとパパが入っているからだと思う。)

ここで、イエソルのお祖父さんが自分の息子のことを、そしてイエソルのお父さんが自分の妻のことを예술아 “yeoi-sor-a!” (「イエソル!」) と呼んでいるわけである。

実際には예술아 “yeoi-sor-a!” (「イエソル!」) という時の微妙な口調の差でイエソルを呼んでいるのか、イエソルのお母さんを呼んでいるのか、イエソ

ルのお父さんと呼んでいるのか区別するのだが、子供にはそれがかなり難しいから、このような歌ができるのであろう。

そしてこの二つの用法、つまり子供の名前を使ってユリの母親を유리 엄마 yuri-eom-ma (ユリのお母さん)と呼ぶ用法も、유리야! yuri-ya! (ユリ!)と呼ぶ用法のどちらも、公の場でも用いられるのである。韓国社会では名前がタブー視される傾向がかなり強いと述べた。実の親子でも、兄弟間でも、ある程度の年齢に達したり、ある程度の社会的地位になったりした相手に対しては、少なくとも公的な場面では名前を呼ぶことはかなりはばかれる。しかし、その名前を呼ぶことを避ける手段として、その人の子供という別の人間の名前を使っているのである。

これの意味するところは何か。

韓国社会においては、子供は一人の人間としてカウントされていないということである。人間になる過程にある存在と言えるのかもしれない。少なくとも大人とは異なった存在と認識されているとは言えると思う。

日本ではレストラン等で従業員が客に「何名様ですか」と尋ねて、客の側が「子供2人を入れて5人です」と答えた場合、その子供が幼子でも「大人3名様とお子様2名様」か、あるいは単に「5名様」と奥に伝えるのが普通である。

しかし韓国では同様の状況の場合、「3名様」と数える場合が普通である。

このこともこの主張を裏付ける根拠と言える。

6. 待遇表現との関連性

日本語と韓国語の敬語の比較に関しては従来、様々な研究がなされてきた。筆者も上林(2010)において、韓国語のいわゆる「丁寧語」に関して、外国語としての韓国語教育という観点から考察を行なった。

そこでは、いわゆる「丁寧語」、多くの研究者にならって厳密な表現をすれ

ば「対者待遇表現」なるものに関して言うと、韓国語における体系は日本語のそれに対してはるかに複雑ではあるが、外国語としての韓国語教育という観点からすると、少なくとも初級・中級の段階では、「です・ます」体と「である」体の二段階からなる日本語と同様に二段階として教えるべきだと述べておいた。

しかし、それはあくまで外国語としての韓国語教育の立場からのことであって、実際の使い分けは完全な二段階ですませるわけにはいかないとも述べておいた。母国語話者にかなり近いレベルを目指す上級の段階では習得しなければならない、この複雑な待遇表現の差は確かにある。しかし、上林（2010）ではあまり明確に触れられなかったが、伝統的に分類されてきた敬語の諸段階と、発生的にはその段階をぼやかすために用いられたとされる略待形及び略待丁寧形とを同じ土俵に載せるのか、それとも略待形及び略待丁寧形を番外として扱うのかに関してこれまで研究者によって意見が分かれてきたが、これは簡単には結論を出せない、検討を要する問題である。

そして、この問題を考えるにおいても、今回考察した、韓国語の人称詞の問題、そしてそこから見えてきた、韓国社会における子供の位置という問題が大きく関わってくると思われる。

韓国語の敬語は、話し手が子供か大人か、相手が子供か大人かということに大きく左右される傾向がある。

例えば上林（2010）でも引用した梅田（1977）では、韓国語の対者待遇表現を基本的に四段階に分けて、それを以下のように説明している。

上称：形式ばった丁寧なスタイルでかたくるしい感じを伴う。子供が親しくない大人に、生徒・学生が先生に、職場の下位者が上司に、店員が顧客に、一般に疎遠な間柄の年齢的・地位的な下位者が上位者に対して用いるほか、未知または疎遠な大人同士の対話などにも用いられる。

中称：成人間で軽微な敬意を表す場合に用いられる。

等称：対者を下位者として遇するものだが、すでに成人しているために子供扱いできない場合に用いられる。

下称：敬意がゼロのスタイルである。大人が大体中学生以下の子供に対して、

子供同士の対話において使われるほか、書き言葉では新聞や論文などの文体として使われる。

そして梅田はこの四段階以外にその番外として略待形と略待丁寧形とを認めている。

ここで四段階の説明すべてに「子供」「大人」「成人」といったことが用いられていることに注意しよう。日本語の対者待遇表現の使い分けに関わるのは、相手が目上か目下かということであって、話し手が大人か子供か、あるいは聞き手が（目下という点では同じであるにせよ）子供か大人かということが直接関わってくるとはあまり思われない。

そして、相手が大人の場合だと、伝統的に段階として分類されてきた下称は使えないが、略待形あるいは略待丁寧形は使えるという場合が多いのである。

例えば、おばが甥あるいは姪に対して、甥や姪が子供のときは “용준아! 고맙다.yon-jun! go-mab-da.”（ヨンジュン！ありがとう。）と言うが、大人になったら “조카! 고마워.jo-ka! go-ma-ueo (yo).”（甥！ありがとう）と言う。ここで、日本語では同じく「ありがとう」になってしまうが、子供の時に使われる形고맙다go-mab-daが下称、大人になってから使われる고마워go-ma-ueoが略待形である。

また “조카들이 다 잘 돼서 기쁘네.jo-ka-deur-i da jar doai-seo gi-bbeu-neoi.”（甥たちがみんな立派になってうれしい。）のように、기쁨gi-bbeo（うれしい）という略待形以外にも기쁘네gi-bbeu-neoi（うれしい）という等称も使われる。しかし子供の時に使っていた下称기쁘다gi-bbeu-da（うれしい）はもはや使えない。

また弟あるいは妹に対しても相手が大人になってからは “동생. 요즘 건강 어떤가? dong-saing, yo-jeum geon-gang-eun eo-ddeon-ga?”（弟、最近、健康はどうだ？） “동생 보려고 왔지 dong-saing bo-ryeo-go oass-ji”（弟に会おうと思って来た）のように어떤가eo-ddeon-ga（どうだ）、왔지oass-ji（来た）といった略待形は使えるが、子供の時に使っていた下称어떠니eo-ddeon-ni（どうだ）、왔다oass-da（来た）は使えない。

また、すでに述べたように、姻戚関係は大人になってからの付き合いなので、子供に対する表現は使えない。例えば妻の妹に対しては“처제! 별 일 없어? 잘 지내지? cheo-jeoi! byeor ir eobs-eo? jar ji-nai-ji?”(妻の妹! 変わったことはない? 元気?)のように없어eobs-eo(ない)、지내지jar ji-nai-ji(過ごす)といった略待形は使えるが、下称없니eobs-ni(ない) 지내니ji-nai-ni(過ごす)は使えない。

妻の弟に対しても“처남! 오랫동안이야.cheo-nam! o-rais-man-i-ya.”(妻の弟! 久しぶりだね。)のように略待形오랫만이야o-rais-man-i-ya(久しぶりだ)は使えるが、下称오랫만이다o-rais-man-i-da(久しぶりだ)は使えない。

これらの例が示すことは、一つは、こういった敬語の使い分けも、韓国社会が大人と子供を別の存在としてとらえていることの一つの根拠と言えるということである。

そして、もう一つは、子供の名前は呼べるが大人の名前は呼べないという韓国語の呼称の特性と、伝統的な敬語の段階のいずれかを使うか、略待形を使うかが連動していることを考えると、韓国語の人称詞を捉える言語理論の構築が、韓国語の敬語の段階をどのように捉えるかという問題を解決してくれる可能性があるということである。

今回は従来ほとんどなされていなかったこの分野の研究の最初のステップとして、一つの仮説を提示してみた。韓国語の人称詞の用法はまだ説明しきれていない複雑な部分が存在する。用法をさらに細密に観察し、分析することによって、韓国文化の特質の一側面の研究、そして言語と文化の関係の研究の発展に寄与することができると思う。

注

- ¹ 以下「呼びかけたり、言及したりする」という表現を繰り返すのは、対称詞が呼格的用法と代名詞的用法の二つを持つからである。前者は相手に呼びかける時の用法、「主

よ、いずこへ行きたもう” “domine, quo vadis?” に現われる「主よ」 “domine” の用法で、ラテン語等では古くは主格 “dominus” とは別の、呼格という独立の変化形を持っていた。後者は「きみが行ってくれればうれしい」「パーティーできみを見かけたよ」などに現れる用法で、ラテン語等では呼格ではなく、その時の格関係に応じて主格、対格、奪格等々が使われる。

- 2 無論、(一) が存在するからと言って、目下の者が自分のことを「あなた」とは言えないという但し書きは必要である。
- 3 なぜこれらの語に限って、子供の時使えるのだろうか。これに対しては、すっかりした答えは今のところ見つからないが、ただ言えるのは、親が子に向う感情はほかの親族に向うものとはかなり異なったものであることが関連しているだろうということである。
- 4 妹の夫に例えば배용준씨 bai yong-jun ssi (ペ=ヨンジュンさん) のように言えないのは、そう言ったら、他人扱いになってしまうからである。韓国社会は日本社会に比べてはるかに「親戚」に対する同属意識が強い。
- 5 しかし、このタブーがまったくないわけではないらしい。以前 MIT の中で教授同士がお互いにファーストネームで呼び合っていたが、Chomsky だけは誰も Noam と呼ばず、Professor Chomsky と呼んでいたそうである。(西山佑司 (personal communication) による。)
- 6 애미 ai-bi、에미 eoi-mi は 아빠 a-bba (お父さん)、엄마 eom-ma (お母さん) とは違って、「誰々の父親」「誰々の母親」の意味である。自分の息子なり嫁なりを、아빠 a-bba (お父さん)、엄마 eom-ma (お母さん) と呼ぶことはできない。아빠 a-bba (お父さん)、엄마 eom-ma (お母さん) と呼んだら、それは鈴木の言う親族名称の第二の虚構的用法になってしまうが、日本語で非常に特徴的なこの用法は、韓国語では三人称として、しかも聞き手が目下であって、その親族名称の基準点の時だけに限られると上林 (2006) に述べておいた。
- 7 「에미 eoi-mi」と「애미 ai-bi」は異形態である。
- 8 Ooe(1958)、大江 (1988)、油谷 (1974)、油谷 (2005) は前者の立場、崔 (1937)、河野 (1955)、梅田 (1977) 梅田 (1991) は後者の立場である。

参考文献

- 崔鉉培 (1937) 『우리말본』 延禧専門出版部
任榮哲・井出里咲子 (2001) 『箸とチョッカラク』 大修館
梅田博之 (1977) 『朝鮮語における敬語』 『岩波講座日本語4敬語』 岩波書店
梅田博之 (1991) 『スタンダードハングル講座2文法・語彙』 大修館書店
Ooe, Takao (1958) "On the Indicative Endings in Modern Korean" 『言語研究』 34 日本言語学会 1-40.
大江孝男 (1988) 「現代朝鮮語の敬意表現体系に関するおぼえがき」 『アジアアフリカ言語文化研究』 35 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 193-200.
上林順錦 (2006) 「韓国語の人称詞」 『防衛大学校紀要 (人文科学篇)』 93
上林順錦 (2010) 「現代韓国語の対者待遇表現の体系 - 外国語としての韓国語教育という観点から」 『防衛大学校紀要 (人文科学分冊)』 100
河野六郎 (1955) 「朝鮮語」 『世界言語概説 (下)』 研究社

- 齋藤明美 (2005) 『ことばと文化の日韓比較 - 相互理解をめざして - 』世界思想社
- 鈴木孝夫 (1968) 「言語と社会」『岩波講座哲学11言語』岩波書店
- 鈴木孝夫 (1970) 「親族名称による英語の自己表現と呼称 - 文学作品に表れた用例を中心とする予備調査」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』1
- 鈴木孝夫 (1971) 「言語における人称の概念について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』2
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
- 油谷幸利 (1974) 「現代朝鮮語の敬語に関する一考察」『朝鮮学報』73. 朝鮮学会1-29.
- 油谷幸利 (2005) 『日韓対照言語学入門』白帝社
- 羅聖淑 (1992) 「韓国と日本の言語行動の違い」『日本語学』11巻13号81-91.
- (映画) 『사랑망 손님과 어머니』(1961)
- (映画) 『축제』(1996)